

住民生活から見る山岳宗教

——蔵王・瀧山信仰と山形県山形市蔵王成沢について——

高野 真由美

山形県と宮城県の県境にそびえる蔵王連峰は、かつては山岳宗教が栄えた山だったという。蔵王連峰に栄えた信仰には、蔵王信仰と瀧山信仰の二つがあり、それぞれ全く違ったものであった。前者の蔵王信仰は江戸時代の山岳宗教全盛期に“西の御山”（出羽三山）に対する“東の御山”として精進おろしの場に利用され、結果的にこうした利用のされ方が現在のような観光地化の土台となっていったと考えられる。一方瀧山信仰は鎌倉時代に封山されたと言われ、その詳細に関しては確かな証拠がない。

山形市蔵王成沢は蔵王信仰登山口のあった蔵王半郷の隣の集落で、しかも瀧山信仰登山口があったと言われている。この集落においては時代的にそ

の全盛が新しい蔵王信仰よりも、700年以上も前に封山したと言われる瀧山信仰の方が主流であった。

その理由として、成沢が瀧山から生活用水を引いていることがあげられる。成沢周辺には須川という川が流れているが、この川の水は鉍毒を含む酸性度の高い水で利用することができなかったため、成沢をはじめとする周辺集落が瀧山の河川・湖沼を利用してきたのである。これらの集落は瀧山十六ヶ郷と呼ばれ瀧山信仰において特別な集落だったという。こうした瀧山の水の供給が、成沢住民の信心を集める結果となったのだろう。

大々的な山岳宗教集落とは言えないが、成沢は住民生活と信仰が調和する趣のある集落であると言える。